

---

### 教育及び実践の課題

---

将来、看護職を目指す者として思いやり、相手の気持ちを考えて動くなどが求められる。しかし、学生をみるとコミュニケーションが苦手、同学年同士でも関わりが希薄であると感じることが多い。学生には、患者を受け持った時、自分のちょっとした配慮で相手が変わることや患者の思いを受け入れるという態度をとることが大事であることを伝え、繰り返し体験する積み重ねが大切である。そのため、ケアリングの姿勢（気遣うこと、関心を持つこと、知ること、共にいる事、可能な力を持たせること、相手の能力を信じる事など）を養うためには、人と関わる時には常に意識して関わる事や相手からも影響を受けていることを実感する機会を作る必要がある。

---

### 活用した論文の概要

---

不妊治療を開始する前に治療が不成功になっても順応できるように準備をさせ、適切なときに、再治療を試みる女性を支援することを目的に、1回目の IVF 治療で不成功だった女性に対する看護をワトソンのヒューマンケアリング理論で評価を行った。ワトソンのヒューマンケアリング理論の実行が愛情深い関係を与えることに役に立ち、手引きになっていた。また、気配りを通して創造的な解決を見つける際のプロセスは、A さんが希望を回復する段階で効果的だった。ヒューマンケアリングの理論は、ストレスが多く、感情的な状況で治療する人に対し、看護師が望み、尊敬、信用および共感的にケアができるように適切に導いていた。

---

### 教育及び実践への活用

---

今年度は学内実習を行う機会が多くあった。保健指導の場面ではお互いに対象者役をすることで対象者の気持ちを想像する、感じるといった相手の立場になった保健指導について考えるに機会になっていた。振り返りでは、ネガティブな内容だけでなく、ポジティブなフィードバックを教員だけでなく、グループメンバーの意見をもらう機会を設けたことで、相手の立場になって考える機会になっていた。それだけでなく、ヒューマンケアリング理論の因子である『CCP #7：教え教えられる「トランスパーソナル」な関係』は、教育の場でも言える。教員がただ一方的に教えるのではなく、学生の反応をみて試行錯誤し、学生からも学ぶこともある。学生－教員間では、教員は学生に教えるという姿勢ではなく一緒に目標に向かっていくという関係性を意識しながら講義や演習、実習を行う工夫が必要であることが検討された。検討を受けて、講義や演習の目的や目標を講義のはじめで共有することを意識的に行った。目的や目標を共有することで、この講義で何を学ぶのかを意識づけることができた。今後も相手の気持ちに気づく関わりや学生－教員で講義・演習を作り上げる、学び合える関係性を意識した工夫に努める。

---

### 参考文献

---

Yeter Durgun Ozan and 2 others (2015) : Implementation of Watson's Theory of Human Caring: A Case Study : International Journal of Caring Sciences, 8 (1), 25－35

---